

2023年 11月

マナ通信



今月のマナ通信

◎9月の週日の聖書日課：ヨハネの黙示録、ハバクク書、ヨハネの福音書

◎土曜日・日曜日の学び：アブラハム、神の子イエス②

からの感想です。

教会時代にはイエス・キリストの十字架の贖いにより、聖霊に導かれて恵みを受けた時代です。パウロの働きのお陰で異邦人にも福音が行き渡り教会が栄えた。しかし、黙示録では大バビロンも倒れます。これは当時のローマの権力であり、その都、その支配を表していると思われます。これは我々に置き換えると、神のみこころを考えず、人間はサタンの影響もあり自分勝手な行動に出たからです。そしてこれは、神は不信の国家イスラエルおよび不信の異邦人の両方に対するさばきを下したのです。

それで、7年間の患難時代を迎えます。地上に戦争がおこり天変地異がおこり、草木、海、河川、空が打たれます。そしてサタンが地に投げ落とされます。地上がこのような悲惨な状態の時に、クリスチャンは携挙されて、空中でイエス様に会い天に引き揚げられます。地上が混乱している時に、非常に幸いな事に地上にはいないのです。天にいます。但し霊の状態だからではありません。ここでキリストのさばきの座につき、地上での働きに見合った報酬をうけます。その上、キリストとの婚姻の場につきます。

7年間の患難時代が終わると、キリストが、その聖徒と共に現れ地上再臨が始まり千年王国を迎えます。新しいエルサレムで我々は栄光のからだをもらい、キリストの花嫁としてエデンの園のように平和な生活を送ります。そこにはサタンはいません、サタンは地下の深い所に閉じ込められています。しかし、この千年王国にもあの患難時代を生き延びてきた人たちが生活しています。その人たちも結婚して子供が出来ます。世代が受け継がれ原罪を持った人たちが増えます。

そして、千年王国が終わると地下に閉じ込められていたサタンが解放されます。サタンはここでも神に対して反抗して軍勢を多く集め戦いを始めます。しかし、天から火が降り注ぎサタンの勢力は一瞬にして滅びます。

「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることに従い、自分の行いに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」

(黙示録20:10-15)



神は福音を信じてなるべく多くの人々が救われるように考えておられることです。教会時代に救いを得ることが出来なかった者の為に千年王国をもうけ1人でも多くの人々が救われるように計って下さったことです。これらのことを知るにつれ、天地の創造主であられる生ける神を信じる者には、神は最上級の扱いをしてくれるということです。(畑中伸之)

今までハバクク書から学んだことがありませんでした。

“みことばを味わおう” から、「ハバククは、かなり珍しい預言者でした」とありました。それは彼が持った疑いについて神様と議論したからです。それだけでなく、預言者という公の立場で、神様がしておられることに対して、それは間違っていると指摘し、対決さえしました。

ハバククは神様を畏れ、ただ敬っているだけの人ではない。ハバククが神様に求めたのは、異教の民に対するさばきではなく、神様に従わないイスラエルの民に対してでした。ところが神様の答えは、カルデア人（バビロニア）を用いて、イスラエルを滅ぼすというものでした（1:5-11）。これはハバククにとって、神様が悪い者たちをさばかれないこと以上に、受け入れがたいものでした。1章12-17節は、神様に対する強い抗議です。

「神様、あなたは永遠の昔から、私たちイスラエルの民の主です。私たちはあなたの契約の民です。それなのになぜ、あなたはあなたの民をさばくのに、異教の民バビロニアを用いるのですか！ 確かにイスラエルは神様の前に罪を犯しました。しかし、今あなたがイスラエルをさばくために用いようとしておられる異教の民よりは、正しい者ではないですか！ あなたは、イスラエルが彼らによって苦しむことを許されるだけでなく、それを積極的に推し進めるのですか！ ……イスラエルは彼らの食べ物にされるのですか！」（12-17節）

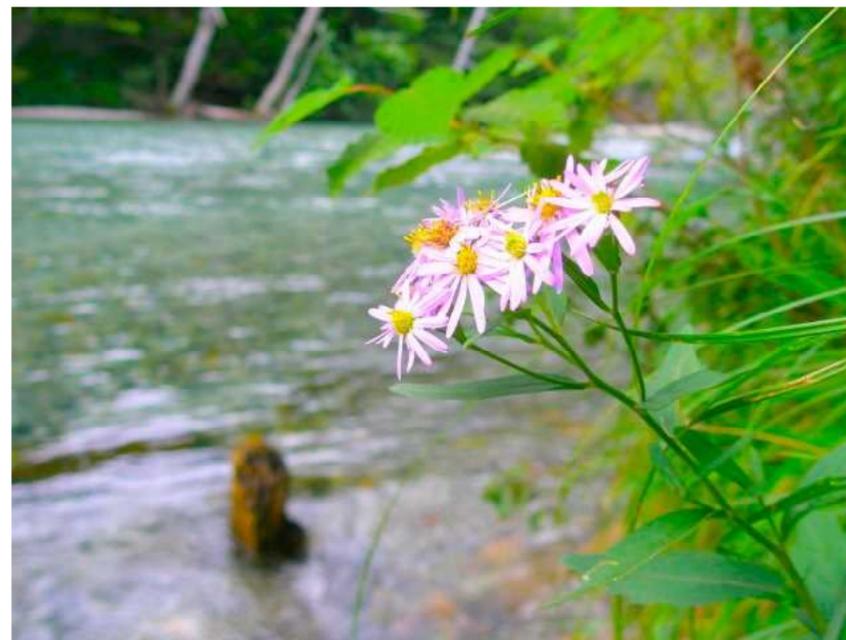
ハバククにとって、神様は完全に正義であり公正な方なのです。そうであるなら、神様はバビロニアを用いてイスラエル全体を滅ぼすのではなく、イスラエルの中にある悪をさばかれるべきなのです。どうしても納得できません。

彼が抗議したのは、神様に対する信頼が揺らいだからではなく、神様は絶対に間違ったことはされないと思っていたからです。彼は抗議するだけ抗議して神様の答えを待つことにしたのです。

そして、神様はハバククに答えてくださいました。2章は神様の答えです。そして3章はハバククの感謝の祈りです。神の民イスラエルを罰するために、神様が用いられる異教の民バビロニアもまた、滅びると言われました。神様はイスラエルの民を救い出されるだけでなく、徹底的にバビロニアを滅ぼし尽くされることを確信しました。

神様がバビロニアを興したのは、最終的にはイスラエルの民を救い出されるために違いない。カルデア人が自分勝手に暴れ回っているわけではない。神様が彼らを抑えきれないわけでもない。神様は彼らをご自分の目的のために利用しておられるのだ。

今日の私はそれを十分には理解していないけれども、ハバククのように神様の真実を確信できます。大いなる神様のあわれみ、恵みを感謝するのみです。(福島三弥子)



信じて待つ」という事の重さを改めて、知らされました。

スピーディーに解決しなければならないこともあります。時には自分にはよいことに思える計画も、中々に進まないこともあります。

ただ待つのではなく信じて待つ事も、又主のご計画の中にあると言うことを、覚えたいです。

「我が救いの神にあって楽しもう。」(ハバクク3章18節)の御言葉に「はっと」させられました。

神様を信じ従うことは、楽しいことでもあるのですよね。

時に難行苦行とまでは行きませんが、「ねばならない」からやると言う気持ちに、襲われることがあります。主にあって楽しむと言う深い境地を、もっと味わいたいです。

「全地よ 主の御前に静まれ。」(ハバクク2章20節)

神様の前に静まれというのは、なかなかできません。

主に祈るだけでなく、静聴という事をもう少し日々の生活の中で習慣にしたいと、思いました。

「私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるかべきかを見よう。」(ハバクク2:1)

(広瀬裕子)



その期間、人々は死を探し求めるが、決して見出すことはない。死ぬことを切に願うが、死は彼らから逃げて行く。」(黙9:6)

いなごの大群による災いで、額に印を持たない人は死にたいと願うほどの苦しみを受けます。しかし人が死にたいと切に願っても、死ぬことができません。

いつの世においても避けられなかった死が、この時は逃げていくというのです。主の絶対的な主権があることを思われます。人のすることに絶対はありませんが、主のなさることは絶対です。

その主が私たちに救いを与えてくださっています。人は学びを通して信仰を深めていき、主の救いの広さ深さを知ればしるほど喜びが増していくのだと思います。

世の中の表面的なことばかりに心が動いて、主の絶対的な救いに心が向いていないことが多々あります。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスになって神があなたがたに望んでおられることです。」(Iテサロニケ5:16-18)

反省しつつ、このみことばにとどまっていたいです。(永井亮子)

その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを受けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。」

そして、ヨハネはこのように証しした。「御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを受けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを受ける者である。』私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。」(ヨハネ1:29-36)

ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」

ヨハネが人々にイエスを個人的に紹介した最初のことばです。

苦難の預言との結びつきがあるとも言われています。イエスは十字架の死において世の罪を一身に背負

い、その罪の力を根底から取り除かれた。どんなに熱心な信仰者であっても、自分の罪を取り除くことや救うことは、人にはできません。

神様が愛する御子を神の子羊としておささげくださる!!! このことに感動です。

「この人こそ、聖霊によってバプテスマを受ける者である。私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。」

旧約時代から動物の犠牲がずっと繰り返されてきました。それらが私たちの罪を完全に取り除くことができなかった。

しかし、キリストは、ただの1度、ご自身をささげることで完全な赦しをもたらしました。なぜなら、この方こそ世のすべての人の罪を取り除く「神の子羊」だからです。ありがとうございます。

主イエス・キリストだけが、人の罪を取り除き、完全に救うことができるお方なのです。「見よ、神の子羊」(木村邦夫)

主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」(ルカ4:18.19)

私は、今年の8月から隣にある母屋で内職をしています。夕方、家に戻ろうとした時、また、お義母さんの腹痛が始まりました。水分を摂ってもらい、お腹、背中、腰をささってあげました。

でも、夕食の準備もしなければなりません。家に帰り、ただただ、主に祈りました。

「どうかお義母さんの腹痛を取り除いてください。」と。しばらくして電話が鳴りました。「さっきの痛みがうそのようになくなって、楽になったよ。」と。

「目の見えない人には目の開かれることを告げ、..」とみことばにあります。真に、主は、救い主であられ、癒し主であられると実感した瞬間でした。感謝します。(外處トミ)

主は我の 祈りを聞いて 成し給う
義母の痛みを 和らげ守る
2023年9月30日



長野県 八ヶ岳 白駒池の紅葉

アブラハムは近寄って言った、「まことにあなたは正しい者を、悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。…アブラハムは言った、「わが主よ、どうかお怒りにならぬよう。わたしはいま一度申します、もしそこに十人いたら」。主は言われた、「わたしはその十人のために滅ぼさないであろう」(創18:23-32)

アブラハムは、「正しい者だけ救い、悪い者は滅ぼしてください」とは願いませんでした。正しい人たちのために悪い人たちをもお救いくださるよう、主に願ったのです。

悪に出会った時、なかなかこのような祈りはできないものですが、主が赦してくださったように、私も赦すことができますように。

(外處光歩)



あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」

(詩篇37:5)

日々、いろいろな課題がありますが、すべてを主にゆだね、主に信頼して歩むことができますように。

神様の前に静まって祈りと礼拝をささげる生活を大切に歩いていけたら幸いです。(外處結実)

見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いです。」(黙示22:7)

聖書に預言されている終末の時代に入り、患難時代の始まりが刻々と近づいているように感じられます。

特に最近は大規模なテロ攻撃を受けています。恐ろしいことばかりがどんどん起こってくる時代になったのは確かです。

そんな世界を生きる中で、何よりも自分に必要なのは、神様から知恵と啓示の御霊をいただくことだと心から思われるようになりました。

神様によって救っていただき、どんな素晴らしい恵みの中で生かされて、どのような将来が約束されているかを知識で知っているだけでは力が無く、神様から与えられる啓示によって真に救われた事実を見て、平安の内に留まれるようになることが何よりも必要なのだと示されます。

福音の実際をはっきりと見せていただけるように、切実に祈り求め続けたいと思います。そして、聖なる道を喜びつつ歩めるようになりたいと思います。それが主イエス様がまもなく来られる前に達したい、私の唯一の願いです。(外處徳昭)

その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。」(ヨハネ1:29-31)

エルサレムのパリサイ人たちがやって来た(翌日)、ヨハネが目を上げると、自分のほうにイエスが来られるのが目に入った。

その瞬間、身震いと感動のあまり、ヨハネはこう叫んだ。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」

ユダヤ人にとって、子羊とはいけにえの動物でした。神はかつて、選びの民に、子羊をほふってその血を犠牲として振りかけよ、と教えられました。子羊は身代わりとして殺され、その血は罪が赦されるため

に流されたのです。

しかし、旧約の時代、ほふられた子羊の血が罪を取り去ることはありませんでした。それらの子羊は視覚的表示、つまり型であって、神がいつの日か、実際に罪を取り去る子羊なるお方を送ってくださる事実の予告でありました。

長年、信仰深いユダヤ人たちはこの子羊なるお方の到来を待ち望んでいました。そして今やその時が到来し、バプテスマのヨハネは、正真正銘の「神の子羊」が来られたことを高らかに宣言したのでした。

イエスが世の罪を取り除く、とヨハネが言ったのは、すべての人の罪がそのゆえに赦される、という意味ではありません。

キリストの死は全世界の罪の代価を支払うに十分な価値のある偉大なものでありましたが、赦されるのは、主イエスを救い主として受け入れる罪人だけです。

キリスト信仰における贖いがどれほど卓越したものかを、次に述べたい。

- ①いけにえの本質においてまさっています。ユダヤ教において犠牲となったのは理性を持たない子羊でしたが、キリスト信仰における犠牲は神の子羊なるお方です。
- ②みわざの効力においてまさっています。ユダヤ教のいけにえは、かえって毎年罪を思い出させるだけでありましたが、キリスト信仰のいけにえは罪を取り去るものでした。「キリストはご自身をいけにえにして罪を取り去られた」のです。
- ③その働きの範囲においてまさっています。ユダヤ教のいけにえは一国家の益が図られただけでありましたが、キリスト信仰のいけにえはすべての国々のためのものです。ゆえに「世の罪を取り除く」のです。

自分より偉大な方がまもなく来られ、自分はその方のために道を備えているにすぎない、とヨハネは、明けても暮れても人々に語るのでした。

イエスがヨハネより偉大であられた、というのは、神は人間より偉大であるというのと同じです。ヨハネが誕生したのはイエスに先立つこと数ヶ月前でした。

しかし、イエスは永遠の昔からすでにおられたのです。「私もこの方を知りませんでした」とヨハネが言ったのは、必ずしも、以前1度も会ったことがない、という意味ではありません。

ヨハネとイエスは従兄弟であったので、お互いをよく知る仲であった、ということは十分に考えられます。

しかし、そのヨハネも、イエスのバプテスマの時が来るまでは、この従兄弟なるお方がよりによってメシアであるとは気がついていなかったのです。

ヨハネの使命とは、主の道を備え、そして主が登場された時、イスラエルの人々に主を示すことでありました。

ヨハネが水で人々にバプテスマを授けてたのは、この理由、すなわち、人々にキリストの到来の準備をさせる、ということにありました。自分に弟子を引き寄せるといった目的ではありませんでした。何と感謝なことでしょう。(福島勲)



貴重なご感想をありがとうございました。

今回はマナ10月号の感想を11月10日までに福島兄弟へお寄せください。(畑中)